

脱経済成長とコモンを捉えた 建築まちづくり／ 地球環境と幸せを考える



JIA まちづくり会議
副議長
連 健夫

JIA建築家大会2023常滑の大会ウィーク(プレウィーク)において、オンラインでシンポジウム「脱経済成長とコモンを捉えた建築まちづくり／地球環境と幸せを考える」を行った。この問題意識は、建築やまちづくりに関わる中で、どのような方向に進めばよいのか?の視点を建築家は常に求められ、その方向性が見えなければ、建築行為は気づかぬうちに間違いを犯している可能性も生じてしまう。その俯瞰的視点を持つためには、建築を単体として捉えるのではなく、まちづくりを含めた幅広い捉え方が必要であり、そこには公共の福祉という公益的視点で建築家の職能を再考することが求められる。そこで、影響的な3冊の本『土地は誰のものか』『里山資本主義』『人新世の「資本論」』を取り上げ、著者の五十嵐敬喜氏と藻谷浩介氏を招いてレクチャーをいただき、『Bulletin』(295～297号)に掲載した読後感も含めてディスカッションを行った。

使用を共同にする／小さな経済循環を作る／次世代へバトンする

五十嵐氏は『土地は誰のものか』を通して、日本は絶対的所有権が強く、それが結果として土地をバラバラにしてしまった。所有権(使用、収益、処分の自由)における使用を共同にすることにより、それらを再び結び合わせコモンとすること、すなわち総有の考え方が大切であると指摘された。藻谷氏は、バイアスのかかったマネー資本主義に惑わされずに、地域の資本をうまく活かすことが大切である。この資本には、人的資本、自然資本、物的資本、金融資本、知的資本があり、それらを自給や物々交換なども含めて、小さな経済循環を作ることが大切であると指摘された。小川真樹氏は『人新世の「資本



オンラインで行われたシンポジウムの様子

マネー資本主義と里山資本主義

	マネー資本主義者	里山資本主義者
共通点	市場原理(価格設定、競争、分業 etc)を前提に、経済活動する	
理念	「経済成長」でパイを無限に拡大	「循環・再生」で社会を維持継続
欲望	ナンバーワンになりたい	オンリーワンになりたい
個人目標	所有財産の無限増加を目指して他人に勝つ、貯め込む	「替わり」のない存在になる =稼いではいやし/バトンをつなぐ
戦略	粗暴バージョン: 他者/他集団から奪い取る	素朴バージョン: 何でも自給自足する
	知能バージョン: 未来/次世代から搾取する 一海外資産を浪費して蓄財する (地下資産、水、土壌、大気、子孫、絆) 一借金や汚染物質を後世に残す	成熟バージョン: お金とお金以外の手法をうまく組み合わせて使う →使ったものは元に戻す →イカクと清浄な環境を残す
	等価交換/金融投資 自由競争/リスクの個人化	物々交換・贈与/実物投資 協働/リスクの社会化
手法		マネー資本主義と里山資本主義を比較した表

論』の読後感を通し、著者、斎藤幸平氏のマルクス論の解釈とともに、価値に対して世代間の捉え方が異なっており、未来を担う若い人にバトンタッチすることの大切さを説明された。

幸せとはなにか?／マンションの課題

ディスカッションでは、幸せとは何か?について「持続可能な生きがいのある生活」といったことや、「人と人との繋がりから生まれ、感じられるもの」などいろいろな捉え方が浮き彫りとなった。土地との関係については、利用権や借地権といった所有権以外の権利において協働することがポイントであり、協働作業の中で人と人との繋がりが生まれる。人との関わりの中でオンリーワンを各自が感じられれば幸せに繋がるとの視点は興味深い。五十嵐氏からマンションの区分所有の問題が指摘された。築40年以上のマンションは全国に116万戸あり、耐震補強や建て替えにおいて区分所有者の合意形成がうまくいかず、立ち往生している困難な事例が多発しており、土地所有の「細分化」の結末である、との話である。大きな問題であり簡単に答えは出ないが、マンションを単独で考えては解けず、地域も含めてまちづくりの視点で解いていく必要がある。マンション自体がプライバシーを重視するがために、人の繋がりを生み出す計画となっていないことも大きな原因である。その困難な状況の中で、建築家に合意形成におけるファシリテーション能力がますます求められるとともに、建築とまちづくりを併せて考える俯瞰的な視点も求められよう。

常滑建築家大会のテーマは「環」であるが、人と人を繋げる、建築と街づくりを繋げる「環」の視点が、当シンポジウムのまとめとして繋がったのは興味深い。